

International Workshop on “Sectarianism in the Middle East : how is it mobilized in politics and conflicts?” 開催の報告

1.

去る9月21日、国際ワークショップ「中東における宗派主義：宗派がいかに政治・紛争に動員されるか？」が東京大学東洋文化研究所大会議室にて開催されました。研究者、学生などの他、官庁、シンクタンクなどからの参加を含めて、延べ約70人の出席を得て、報告への真剣な関心と、活発な議論が交わされました。

研究代表の酒井（千葉大学）よりシンポジウムの目的、プロジェクトの趣旨が語られたのち、ファナル・ハッダード シンガポール大学中東研究所上級リサーチフェローより、「宗派主義を「脱神秘化」する：宗派アイデンティティと中東研究」との報告がなされました。ハッダード氏は、「宗派主義」という用語のもつ問題性を洗い出し、それがそもそも中傷と排除の意味を含む政治化された概念を表したもので、敵を攻撃する上で融通無碍に使われてきたことを指摘、日常的に表出する宗派の違いに基づく差異を分析する概念として用いることが困難であると主張しました。

この指摘によって、そのあとに続く報告が、「宗派主義」を自明のものとして語るものの問題性を強く意識したものとなるなど、シンガ冒頭の研究姿勢を規定するものとなりました。続くマデリーン・ウェルズ米 국무省 南・中央アジア局民主主義・権利・労働問題課の外交問題オフィサーは、「クウェートにおける宗派主義と権威主義」との題で、報告を行いました。その報告は、クウェートの首長制がムスリム同胞団などの本格的な反体制派、野党勢力を抑制し弱体化させ、権威主義体制を確立するために、いかにシーア派住民を利用してきたかを解明することに、力点が置かれました。

続いてニュージーランド・オタゴ大学のウィリアム・ハリス教授は、「シリア・イラク戦闘地帯における宗派に基づいた破壊と炎上 2011-2017」との題で報告を行い、シリア政治における宗派に基づく分断要因は従来指摘されてこなかったこと、アサド政権の問題は権威主義体制としてのそれであって宗派が原初的な問題ではなかったこと、イランなどの外部介入により対立が先鋭化していったことなどを、時期区分に基づき指摘しました。

休憩を挟んで後半には、英エグゼター大学のマーク・オーウェン・ジョーンズ講師が、「中東におけるオンライン上の宗派主義的アラビア語ディスコースをマッピングする」との題で、アラビア語で交わされるツイッター、FBなどのSNS情報を解析することで、宗派に基づくヘイトスピーチがいかなる出現の仕方をしているのかを分析しました。国別ではサウディアラビアにおいて最も反シーア派的ヘイト発言が多いことが見て取れましたが、エジプトも比較的多いこと、またイラクで反スンナ派的ヘイト発言が多いのは想像がつくがここでもサウディで比較的多いことなどが、意外な結果として提示されました。

最後の報告者はデンマークのモーティン・ヴァルビョルン・オーフス大学政治学部准教授で、「中東の新旧地域冷戦における宗派主義的超国家アイデンティティ」との題にて、「中

東の新冷戦」とも指摘される現在の域内関係について論じました。氏は自身の大学で「アラブ反乱後の宗派主義：本質主義的議論と道具主義的議論の双方を超越する」とのプロジェクトを推進しており、そこでは「アラブの春」以降域内政治、国際政治の動態が喚起されたが、そこにおいては超国家的なアイデンティティの役割が大きく、「新冷戦」構造を支えるものとなっていること、そして宗派的枠組みは過去にもあったものの 2011 年以降大きく意味が変質していることを、指摘しました。

これらの報告に対して、英ロンドン大学 SOAS・中東研究所の ハッサン・ハキミアン所長からコメントがありました。その趣旨は、宗派主義を強調しすぎることは中東を特殊視する従来の学問上の制約を助長することになり、むしろ中東以外の他の事例にも適用される一般的分析手法を用いて現在の対立状況を説明する視点が必要なのではないか、というもので、特に同所長の専門が政治経済学であることから、自身が強調する「包摂的成長」指標をもって「アラブの春」を分析することの有効性を指摘しました。

以上の報告とコメントを踏まえて、全体討議が行われましたが、そこでは「宗派主義」をいかにとらえるべきかについて、質問が集中しました。特に宗派主義が他のコミューナルなアイデンティティとどのような差異があるか、同じようなものとしてエスニシティ同様に扱うべきなのか、異なるとすればそれを規定しているのは何か、といった質問が出されました。同じ流れで、ワッハーブ主義が出現した際にそれらを（今「イスラーム国」に対して言っているように）「宗派主義的である」と呼ぶことはなかったことを考えれば、時代的な要因（近代特有な現象としての「宗派主義」）を考慮する必要があるのでは、といった意見も提示されました。

午後 3 時から 4 時間という長時間にわたる報告と議論でしたが、ほとんどの参加者が最後まで出席し、活発な議論が交わされました。このことは、中東における「宗派」的傾向を強く持った域内対立・紛争が頻出していることに対する危機意識の高さだと言えるでしょう。

2.

9 月 22 日、同国際ワークショップの 2 日目は、1 日目の報告者と科研分担者との間でのクローズドセッションが本郷サテライト 8 階会議室で開催されました。

そこでは、研究代表者の酒井より、「グローバル関係学」を導入する現代的意義についてとその理論構築過程の説明、そして「関係学」を前面に出した形で「宗派対立」を分析するとどのような議論の立て方になるかについて、議論のたたき台になる報告がなされました。

これに対して、21 日の報告者たちからコメント、意見を募ったところ、画期的なアイデアではあるが理論的枠組みが複雑すぎて実際の事例をどのように分析するかが問題になるだろう、という点、インターディシプリナリーな試みであるがゆえに具体的な事例分析

は十分戦略的に行っていく必要があるという点、地域研究を中心とした類似のインターディシプリナリーなプロジェクトを行っている研究機関としてドイツの GIGA があるので参考にするのがよいのでは、という点、比較分析や歴史分析を十分に組み込むとよい、といった意見が出されました。

今後「グローバル関係学」の理論構築を進める上で、貴重な意見を多々いただき、今後の研究方法に大きな指針となりました。

(文責：酒井啓子)